

福島県立医科大学 学術機関リポジトリ



Title	女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割に関する調査研究
Author(s)	貝沼, 純; 斎藤, 美代; 佐藤, 尚子; 宍戸, 朋子; 林, 正幸
Citation	福島県立医科大学看護学部紀要. 10: 23-30
Issue Date	2008-03
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/82
Rights	© 2008 福島県立医科大学看護学部
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-05-25T23:37:44Z

女性看護師が男性看護師に期待する職務・役割に関する調査研究

貝沼 純¹⁾ 斎藤 美代²⁾ 佐藤 尚子³⁾
宍戸 朋子³⁾ 林 正幸⁴⁾

The study of female nurses hope with male nurses on their profession

Jun KAINUMA¹⁾ Miyo SAITO²⁾ Naoko SATO³⁾
Tomoko SISIDO³⁾ Masayuki HAYASHI⁴⁾

I. はじめに

従来、女性の職場・分野とされていた看護師の職場でも男性の進出は増えている¹⁾²⁾。それに伴い、かつて男性看護師が活動する分野は、精神科が殆どであったが、最近ではそれ以外の現場にも従事することが増えてきた³⁾⁴⁾。

男性看護師の活動・職域が拡大していく一方、患者やその家族には、排泄や清潔に関する看護業務について、男性看護師を敬遠したい願望が多く見受けられる。患者を対象に行なった小嶋ら⁵⁾の研究でも、排泄や清潔について同様の結果が明らかになっている。このことはケアを受ける患者側だけでなく、看護師のチームとしての業務に影響があるのではないかと考えた。

女性看護師を対象にした男性看護師への期待する職務・役割は、先行研究において若干の文献的記述はあるが、いずれも調査・分析対象者数が100例前後と少ない上、抽象的な方向性を述べているにすぎず、男性看護師の役割について具体的な記述はなかった⁶⁾⁷⁾。

このことから、看護業務の活性化或いは支障となりうる要因を明らかにし、女性看護師が男性看護師に期待する役割とは何かを調査により明確にすることを試みた。

II. 研究目的

女性看護師が同じ職場で働く専門職としての男性看護師に期待する職務・役割を明確にし、男性看護師の活動に於ける今後の方向性を探る。

II. 研究方法

1. 研究期間：平成18年11月～12月
2. 研究対象：A県内の病床数200床以上の病院看護部長に調査を依頼し、同意を得られた19施設に勤務する女性看護師1,058名とした。
3. 研究方法：独自に作成したアンケート用紙を用いて、男性看護師が行なう看護業務、男性看護師に抱いているイメージ、期待する役割（立場）、男性看護師との協働意欲、適・不適と考える配属部署についてのアンケート調査を行なった。質問項目は14項目で、回答方法は選択式と一部自由記述によるものとした。
4. データ収集方法：各病院に依頼して、看護師の職場の代表者である看護部長・師長を通じて配布した。回収は、無記名・任意とし、留め置き法もしくは郵送により行なった。
5. データ分析方法：統計ソフト SPSS11.5J による単純集計、クロス集計、 χ 二乗検定により行ない、有意水準は $p < 0.05$ とした。
6. 倫理的配慮：調査にあたって対象者に、調査の目的と、個人のプライバシーの特定や侵害がないことを調査紙上に記載し説明した。同意の確認は返信をもって参加・協力することです承を得た。

III. 結果

1. アンケートの回収率は対象者1,058名に対し898名(84.9%)、そのうち有効な回答は897通(回収数に対

1) 公立大学法人福島県立医科大学附属病院手術部
2) 同大学付属病院5階東病棟
3) 同大学付属病院8階東病棟
4) 同大学看護学部総合科学部門情報科学

Key words : male nurse, nurse, gender, Nursing needs, Nursing act
キーワード : 男性看護師, 看護師, 性差, 適性看護, 看護行為

し99.8%)であった。

有効回答897通のうち男性看護師と一緒に働いた経験のあるのは54.3%, なしが45.7%だった。調査項目について、いずれの項目においてもほぼ同等の結果であったので、全体を分析対象とした。

2. 回答者の年齢構成は20~24歳12.2%, 25~29歳19.5%, 30~34歳15.2%, 35~39歳15.4%, 40~44歳14.3%, 45~49歳11.1%, 50~54歳8.1%, 55歳以上4.2%であった。
3. 職位は部長(総婦長)0.4%, 副部長(副総婦長)1.1%, 師長5.4%, 副師長4.1%, 主任22.3%, 副主任8.5%, 看護師52.3%, 准看護師5.2%, その他0.7%であった(図1)。データの集計・分析は職位を「部長(総婦長)」「副部長(副総婦長)」「師長」を“管理職”, 「副師長」「主任」を“中間管理職”, 「副主任」「看護師」「准看護師」「その他」を“スタッフ”とカテゴリー化して行なった。
4. 経験年数
1年未満3.9%, 1~3年9.3%, 4~9年24.6%, 10~20年32.9%, 21~30年22.1%, 30年以上7.2%であった(図2)。
5. 女性看護師が男性看護師と一緒に働いて良かったことでは、患者のケアに関する事42.4%であり(図3-①), その内訳は患者の不穏時の対応や患者の移動時など、力仕事が80.7%だった。(図3-②)。
6. 女性看護師が男性看護師と一緒に働いて困ったことの中で、患者のケアに関する事が30.5%であり(図4-①), その内訳は、女性患者の看護・処置等に関する事が90.5%だった(図4-②)。
7. 女性看護師が男性看護師に抱くイメージは、全体で

は「力強い」(19.5%), 「やさしい」(14.7%), 「頼りになる」(14.2%)の順に多くあり、職位と年齢別では差がなかった。(図5, 6)

8. 女性看護師が男性看護師に期待する役割では、管理職と中間管理職は「リーダー的役割」(24.3%), 「専門性を高める」(24.9%), スタッフは「患者不穏時の対応」(29.4%), 「スタッフ間の潤滑油的役割」(22.1%)が多く見られた(図7)。
9. 男性看護師に行なって欲しくない看護業務を患者の男女別で見ると、「絶対にしてほしくない」と「してほしくない」を合わせた結果は、男性患者では全ての項目において極少数であった。これに対し、女性患者では摘便(66.8%), おむつ交換(55.3%), 便器・尿器挿入(57.5%), 導尿(70.5%), 浣腸(61.7%)入浴(63.3%), 清拭(55.9%), 陰部洗浄(72.6%), 乳房マッサージ(89.6%), 悪露交換(88.8%), 外陰部消毒(88.5%), 授乳(67.3%)の、排泄や清潔、妊娠・産褥に関する項目において半数以上を占めていた。(図8-①, ②)。
10. 女性看護師の男性看護師との協働意欲は、81.3%と一緒に働きたいと答え、男性看護師と一緒に勤務経験の有無での χ^2 乗検定における統計学的有意差はなかった($P=0.101$)。
11. 女性看護師が考える男性看護師の適する配置では、精神科(29.6%), 整形外科(22.8%), 手術室(19.5%), 脳外科(19.0%), 外科(13.6%), 産婦人科以外の部署(12.8%)の順で多く見られた(図9)。
逆に適さない配属では、産婦人科が90.3%と圧倒的に高かった。次いで乳腺外科が4.2%だった。女性看護師の職位間による回答の差はなかった。

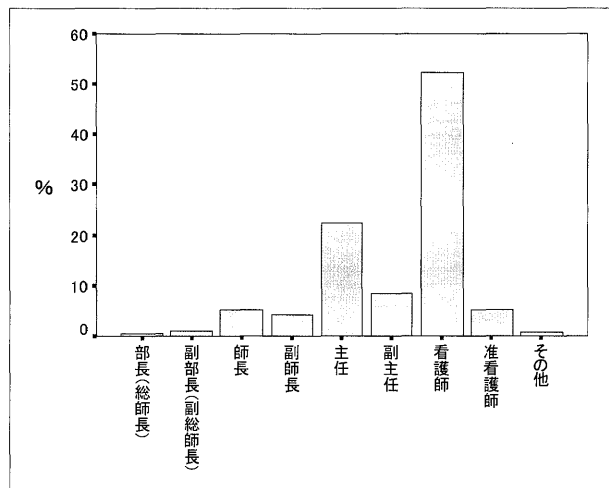


図1 職位

n = 897

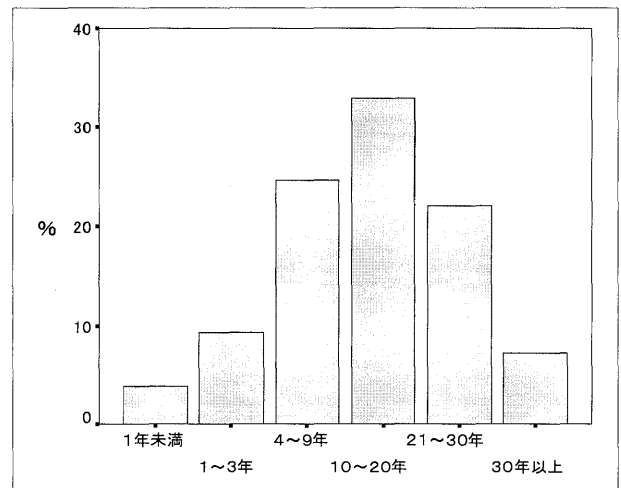


図2 経験年数

n = 897

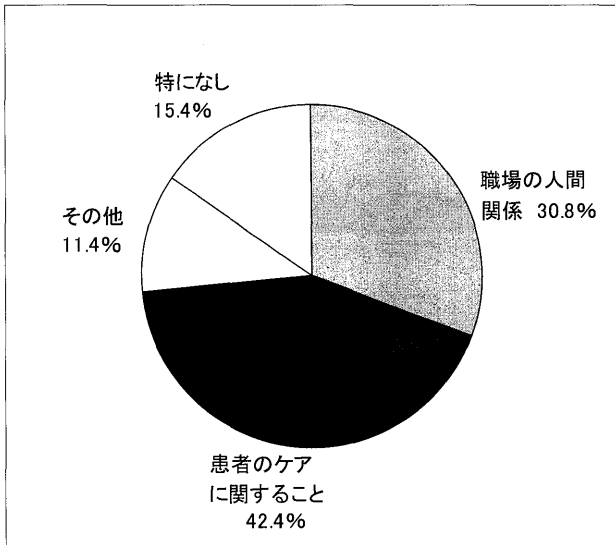


図3-① 女性看護師が男性看護師と一緒に働いて良かったこと（複数回答）

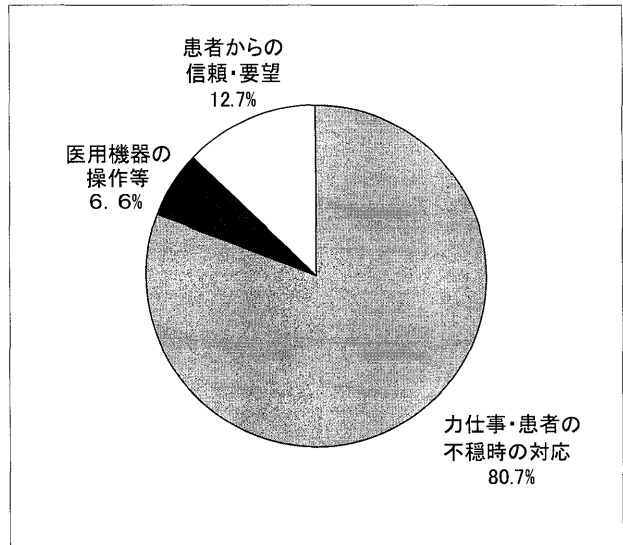


図3-② 患者のケアに関することの内訳（複数回答）（女性看護師が男性看護師と一緒に働いて良かったこと）

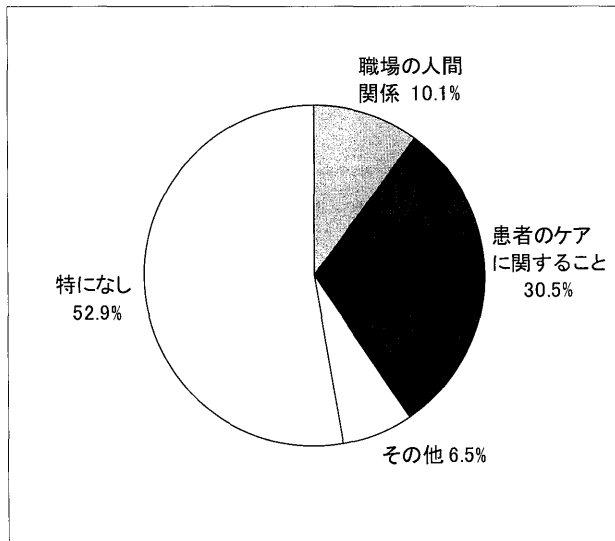


図4-① 女性看護師が男性看護師と一緒に働いて困ったこと（複数回答）

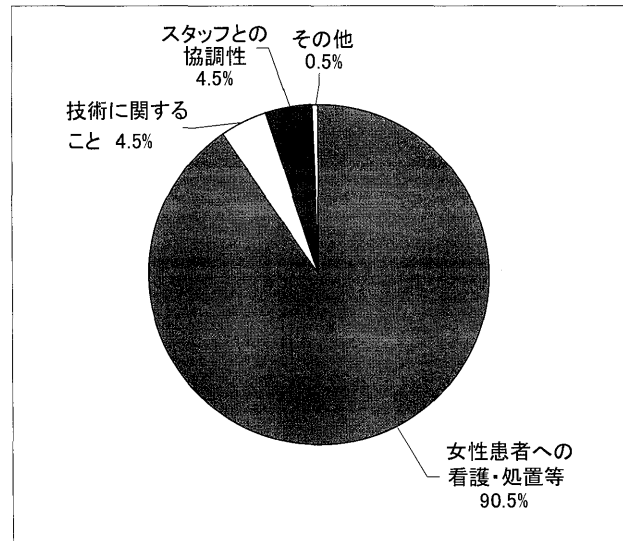


図4-② 患者のケアに関することの内訳（複数回答）（女性看護師が男性看護師と一緒に働いて困ったこと）

IV. 考 察

今回の調査において、女性看護師の男性看護師に対するイメージ（女性看護師が男性看護師に対して抱く抽象的概念）は、「頼りになる」「力強い」「やさしい」が多かった。しかも「期待する役割」との関連性もうかがわれた。

女性看護師が男性看護師に期待する役割では、「リー

ダー的役割」「専門性を高める（看護における高度な専門性）」が管理職・中間管理職で多く、現場スタッフは「患者不穏時の対応」「スタッフ間の潤滑油的役割」が多かった。

管理職・中間管理職が期待する「リーダー的役割」については、女性看護師が男性看護師に対して抱くイメージに挙げた「頼りになる」と同意義と考えられる。そしてこれらのイメージが、従来の日本の企業や官公庁の

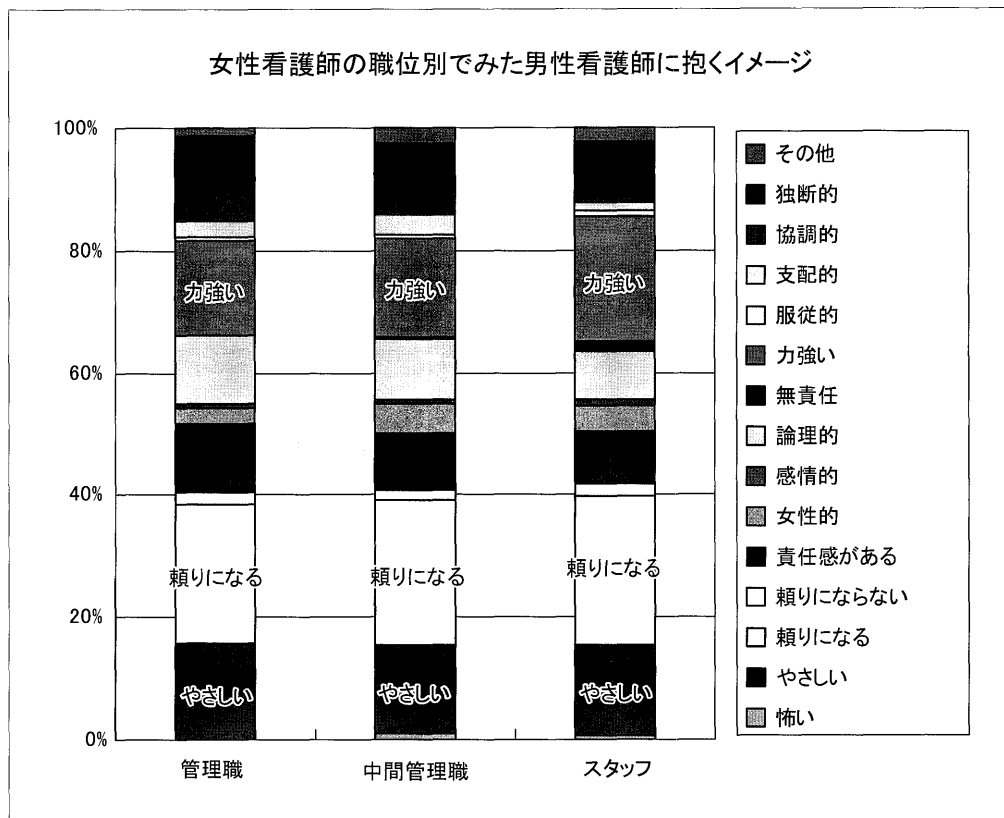


図5 女性看護師の職位別にみた男性看護師に抱くイメージ (複数回答)

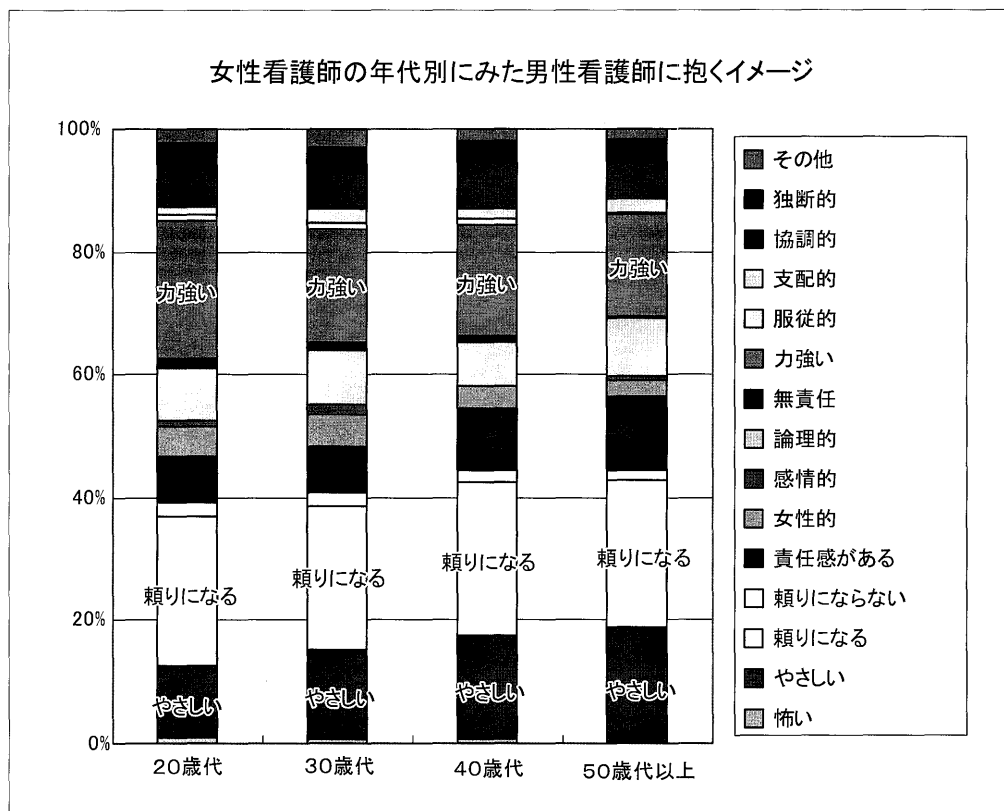


図6 女性看護師の年代別にみた男性看護師に抱くイメージ (複数回答)

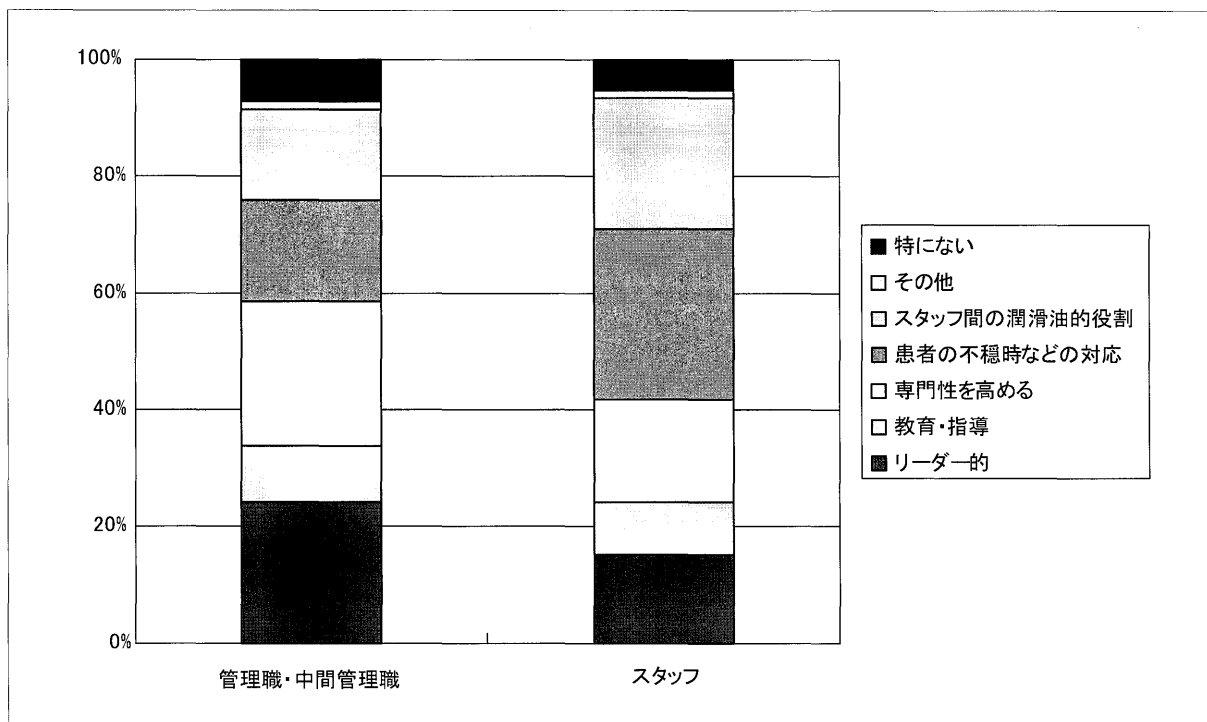


図7 期待する役割 (複数回答)

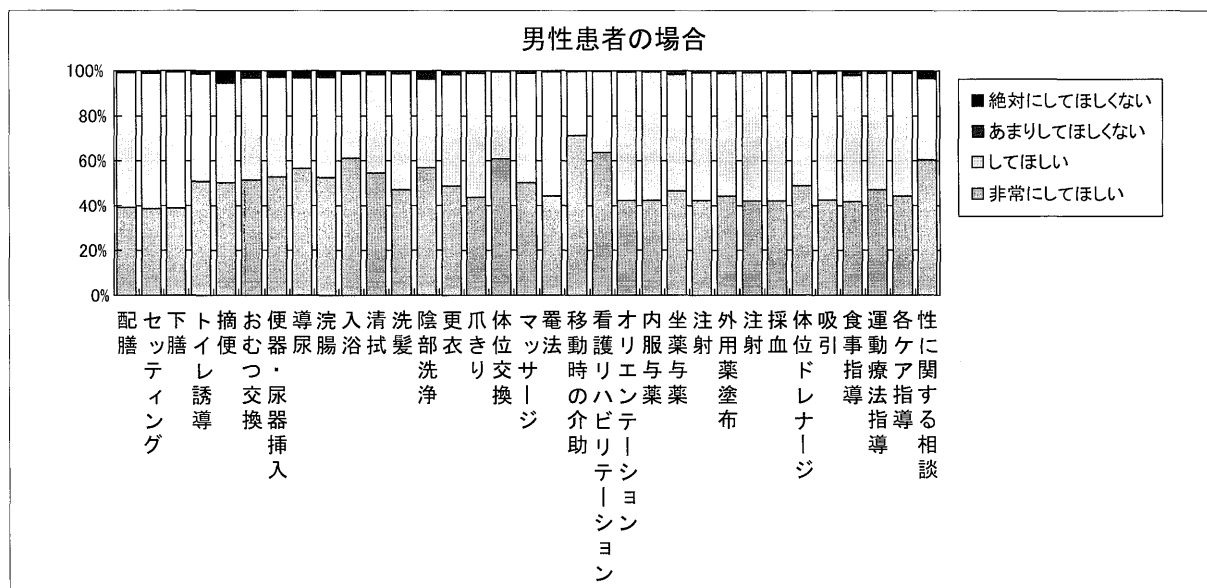


図8-① 男性看護師に行なって欲しくない看護業務 (n = 897)

管理職の多くを、男性が占めていたことによる組織形態や、性別による身体的特徴等によると思われる。

「専門性を高める」については、男性の多くが就職後は勤務を中断しないで退職まで継続していくことが多いのに対し、女性看護師は結婚・出産・育児・家事等に従事することになると、就業中断により職場における継続的・均質的な労働力の提供と知識・技術の蓄積・向上が困難となりやすい。

このことが、管理職・中間管理職が職場環境の発展と人材育成の視点から、男性看護師に対して期待する一要因となっているとも考えられる。結婚や子育ての時期の女性看護師においても専門性の向上は期待されるべきであるが、前述のような継続的・均質的の就業継続の問題や、年収・税制など、社会制度上の問題から家庭と職業の両立が困難であり、その年齢層における組織での不足部分を男性看護師に期待されているとも考えられる。白井

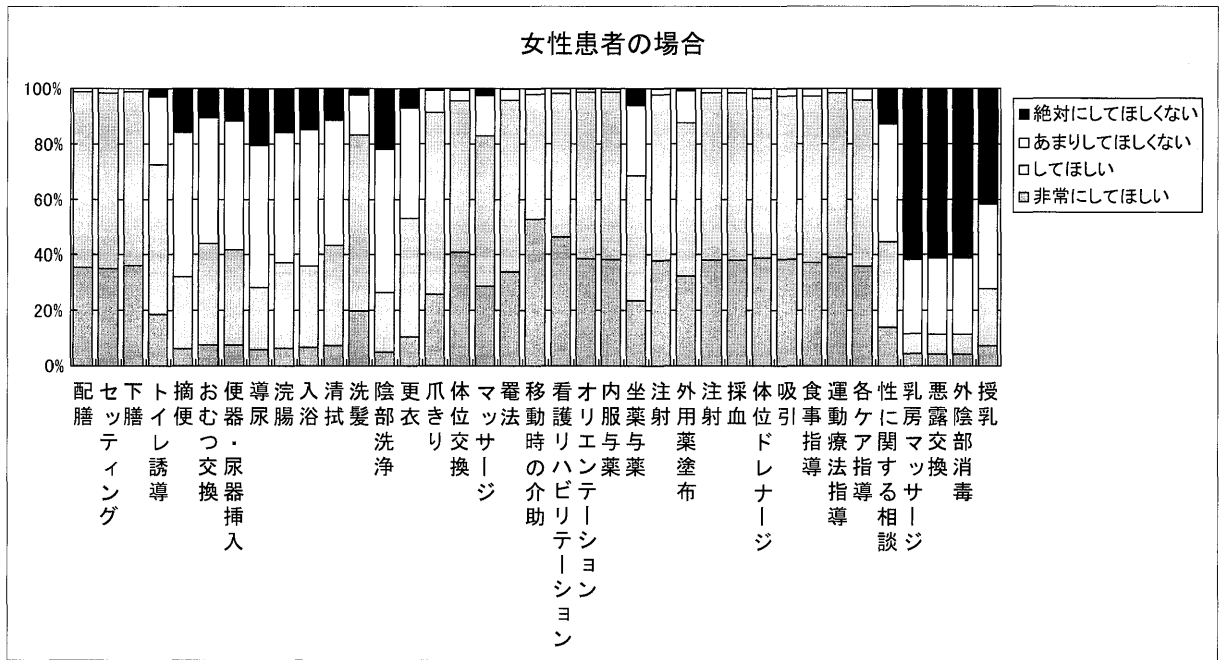


図8-② 男性看護師に行なって欲しくない看護業務 (n = 897)

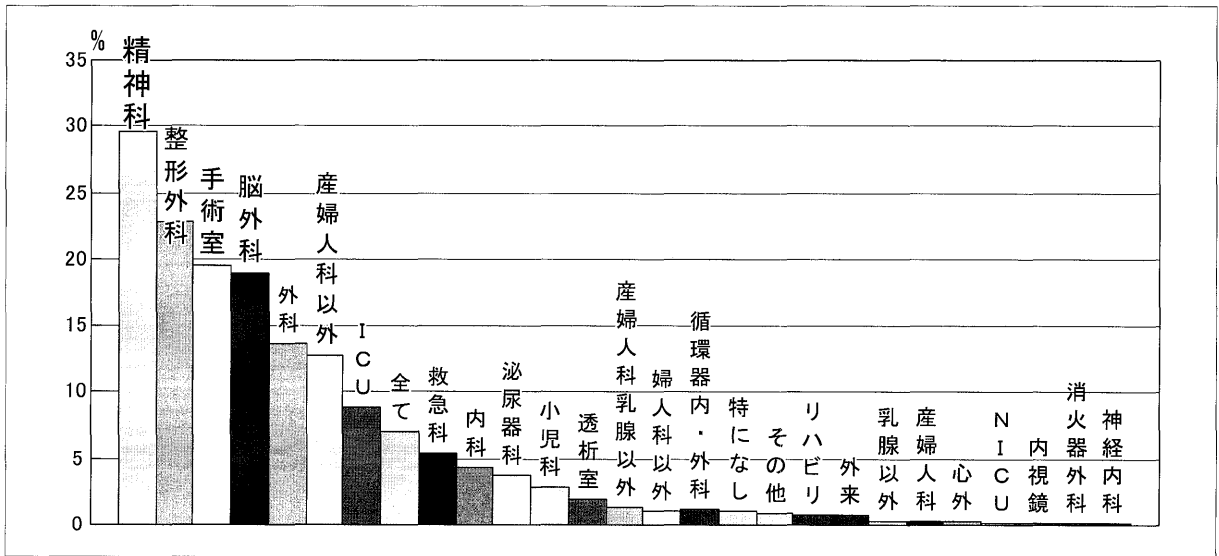


図9 適する配属 (複数回答)

ら⁸⁾の、男性看護師の職務意識に関する研究では、男性看護師の進出要件の一つに専門性追及意識、すなわち「専門性の向上」を挙げており、今回調査結果の女性看護師が期待する役割と一致している。

一方、現場スタッフに多かった「患者不穏時の対応」「スタッフ間の潤滑油的役割」については、現場における即応体制を求めることにあると思われる。特に「患者不穏時の対応」は、女性にとって不利または危険な“力”への対応の期待からと考える。「スタッフ間の潤滑油的

役割」は、女性だけの集団という環境に、少数でも男性が入ることで、考え方・視点の違いが明確となり、画一的対応から現実的・効果的な柔軟性を持つ対応が期待されているためと推測する。また、男性看護師自身も少数であるがゆえに、円滑な対人環境をつくらなければ活躍の場が制限されるので、潤滑油的役割を担おうと意識し行動してきたことにもよると考えられる。

女性看護師が男性看護師と一緒に働いて良かったと思う点は、患者のケアに関することが半数近くを占め、そ

の内訳は患者の不穏時の対応や患者の移動など、“力仕事”が挙げられた。このことは、先に述べた男性看護師に期待する具体的役割と女性看護師が男性看護師に抱く抽象的イメージとが繋がっていることと関連し、これにジェンダー・ステレオタイプによる印象も反映した結果とも考えられる。また、矢原⁹⁾が、「男性看護師の配属がまだ精神科病棟に偏っており、またそうした病棟以外においても、暴力的な患者への対応を任せられる傾向が背景にある」と述べていることと同様である。このような一般的傾向を受けて、現場においては現実的な力仕事を行なった結果として、女性看護師が男性看護師と一緒に働いて良かったと思っていることに関連していると考えられる。

一方、女性看護師が男性看護師と一緒に働いて困ったことについて、「特になし」が半数を占めている。その次には、「患者のケアに関すること」が挙げられており、その内訳は女性患者への看護・処置等に関することであった。男性看護師が行なうべきではないとされた項目は、女性患者への排泄、清潔、妊娠・産褥に関する看護業務であった。これら看護業務には同性対応を望まれるが、その結果女性看護師に業務負担が増えることから、「困ったこと」に挙がっているものと考えられる。

男性看護師はその業務において、男性・女性の別をなくする“男性性の不可視化”¹⁰⁾という視点での困難性を抱えている。しかし、現状の性別役割分業のような社会の認識と生命体として男女がほぼ同数である現実において、要望に対する絶対数の確保ができる社会環境にあるとは考えにくい。また、「特に困らない」という意見が「困る」より多かったことにも着目すべきである。

それよりも、男性看護師による女性患者への看護にあたっては、性差を意識させないように心がけることが重要であり、羞恥心を上回る信頼を得る為に、高い知識・技術を身に付けることや女性看護師と共に患者との良好な人間関係を構築して看護に当たる努力が必要である。

男性看護師に適した配属は精神科・整形外科・手術室・脳外科の順であった。精神科への配属は、従来から半ば慣習的に行なわれてきたことや、かつての看護教育において、男性は産科婦人科領域を精神科に読み替えていた経緯がある。また、整形外科・手術室・脳外科においても、男性の力仕事に期待が寄せられていた。

しかし、男性看護師への期待が“力”や“不穏時の対応”に今後も偏りがあれば、男性看護師の存在意義にも影響してくる。男性看護師は女性患者や女性看護師から忌避される看護業務にあえて就業したいとも考えないし、その必然性もないとは思われるが、本質的に男性も女性も同じ看護師として活躍するため、男性看護師自身が看護師としての質の向上に努力し、女性の看護師や患

者または社会は「医療上の性差に対する認識」の変容を検討しても良い時期ではないかと考える。

一方、近年では女性専門外来の新設など、性差を意識した取り組みが始まっており、病棟など看護の現場においても女性患者が望むのであれば、性差を考慮した関わりを推進していくことも必要と考える。ただし、社会が男女ほぼ同数で形成されている現状の中、看護師の性比が20対1であることのパラドックスも問題となるであろうことが今後の課題である。

現状の看護における現場では、男性看護師が女性看護師と性差なく業務を行なうことは、業務内容により困難があるが、職場の潤滑油的役割の期待も多くあり、男性看護師と女性看護師のそれぞれがお互いの立場を理解することで、性差による業務上の不都合を乗り越える一助となりうると考える。

おわりに

看護師がその性差をとりはらい業務を行ない得ることは、患者の男女比と看護師の男女比のアンバランスに起因する、女性看護師の負担を減らすことにもつながると考えられる。また、男性看護師の配属部署が拡大しつつも、限局化している現状があるが、更にその配属部署が拡大し、活躍の場が増加することが予測できる。

現在の社会・文化的背景や職場環境においては、男女間の性差の無い職務・役割には制限がある。男性看護師と女性看護師がより良い関係で業務を行なうには、男性看護師と女性看護師がそれぞれのジェンダー上の立場を理解して業務を行なうことが必要であり、そのことが看護の更なる発展につながると考える。

謝 辞

本研究に当たり、研究の機会を与えてくださり、ご指導・ご協力を頂いた福島県立医科大学附属病院看護部北原部長をはじめ、その他調査研究にご協力いただいた各施設看護部長および看護職員の皆様に深く感謝申し上げます。

また、同調査研究グループ七海賀代子、吉川美保、渋谷恵美氏に深謝します。

なお、本研究は、福島県立医科大学看護学部と同大学附属病院看護部との合同研修事業「看護の実践における情報処理と看護研究」の一環に行ない、福島県立医科大学プロジェクト研究(特別研究)の助成により実施した。

引用・参考文献

- 1) 矢原隆行：男性看護職をめぐる課題と戦略，看護学雑誌，66(11)，1006-1007，2002.
- 2) 看護問題研究会監修：平成18年看護関係統計資料集，日本看護協会出版会，2006.
- 3) 前掲1) 66(11)，1007，2002.
- 4) 山田正巳：男性看護師の歴史と現状からの1考察，看護教育，45(11)，1032-1037，2004.
- 5) 小嶋亜紀子，筑後幸恵：男性看護師に対する入院患者の受容，日本看護学会論文集看護管理，35，366-368，2004.
- 6) 菅野美江子：看護師への役割期待-K大学病院における調査をとおして-，第27回日本看護学会（看護管理）集録，p.74-77，1996.
- 7) 橋爪俊喜，山下みよ子，中西りつ子他：看護師の看護業務遂行に対する評価と期待度，第23回日本看護学会（看護総合）集録，p.231-233，1992.
- 8) 白井瑞子，矢立雅章，内藤直子：男性看護師の職務意識に関する研究，香川医科大学看護学雑誌，7(1)，55-63，2003.
- 9) 矢原隆行：看護職におけるジェンダー体制の今日的状況，看護管理，14(2)，164，2004.
- 10) 前掲1) 66(11)，1010，2002.
- 11) 伊藤公雄：女性学・男性学・ジェンダー論入門，有斐閣，2002.
- 12) 朝日新聞社編：ジェンダーがわかる，朝日新聞社，2002.
- 13) アラン・ピーズ，バーバラ・ピーズ，話を聞かない男，地図が読めない女，主婦の友社2002.
- 14) 船橋恵子：看護とジェンダー，看護教育，42(1)，14-18，2001.
- 15) 矢立雅章，白井瑞子，内藤直子：看護師の職務満足度に関する研究，香川医科大学看護学雑誌，6(1)，75-82，2002.
- 16) 牧野尚子，北池 正，安岡満利子他：看護における男性の進出に関する研究，(3)，日本看護研究学会雑誌，19(4)，p. 9，1996
- 17) 山崎祐二：男性看護職の感情の歴史点描，看護学雑誌，66(11)，p.1012-1017，2002.
- 18) 山田正巳：父性看護学確立への提言，看護学雑誌，66(11)，p.1018-1021，2002.
- 19) 新山英和，水口清美，橋村抄子他：一般病棟における男性看護師の関わりと患者の認識の変化，日本看護学会論文集看護管理，35，p.369-370，2004.
- 20) 橋本亘弘，山中美子，文 才理：男性看護師のケアに対する女性患者の感じ方に関する調査，日本看護学会論文集看護総合，34，p.233-235，2003.
- 21) 生野繁子：看護職の性差別撤廃の必要性-男性看護職の現状と男子学生のアンケート結果を参考に-，九州看護福祉大学紀要，1(1)，107-115，1999.